
空気をつかむ者

YSR

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

空気をつかむ者

【Nコード】

N3714G

【作者名】

YSR

【あらすじ】

水谷空、15歳。指先で原子を感じる能力を持つ男。そんな彼が、北上高校に進学。彼の学園生活が始まった。

第1話 空気。

—

空気は、さらさらしているものだと思っていた。

水は、さらさらしているものだと思っていた。

布も、ビー玉も、人の肌も、みんなざらざらして、つるつるなんて無いものだと思っていた。

それなのに。

周りのみんなは違う。手を振ってもなにも感じないし、水もさらさらとか言うし、「つるつるの氷」なんてことも言う。みんな、どうしたんだろう。

・・・あ。

もしかして、自分がおかしいのかもしれない。

そう悟ってから、かれこれ10年。あれは5歳のときであった。保育園のころである。友達に、こう聞いてみたのだ。

「水って、ざらざらしない？」と。

すると友達は、こう答えたのだ。

「そんなわけないだろー、お前、なんかおかしいぞ」

子供とは残酷なものである（自分もまだ子供だが）。その発言で、自分の感覚は人とは何か違うのではないかと悟ったのだ。

そこから、特訓が始まった。人におかしく思われたくない。その一心で、見た目からつるつるかざらざらかを見分けるために練習した。暗記した。努力した。

その努力あつてか、どうにか「変なやつ」呼ばわりされず、平和に過ごしてきた。

しかし。15歳、中学三年の卒業式の日、ハツとした。

これは、間違っていることなのではないのか。自分の感情をひた隠しにして、それで一生を過ごすのか。いや、違う。そうであってはならない。僕はそう気が付いたのだった。

これからは、自分の気持ちに正直になろう。水谷空^{みずたにそら}、15の悟りであつた。

二

それから二日間、考え、調べ、また考えた。自分のその感触は、いったい何なのか。

皮膚の病気でもない。神経でもない。ましてや脳の異常でもない。なんとか今までやってきたのである。

あれこれ探しても分からず、悶々とした。

分からぬまま、次の日の昼。

ふと、中学時代の教科書が目に入った。

懐かしいなあ、と思いながら、パラパラとページを捲っていく。そうしていると、ふと、あるページに目が留まった。

理科の教科書の、「原子」についての項であつた。

それに載っていた電子顕微鏡写真（1）を見て、ハツと閃いた。「これだ！」

そう、気が付いたのである。自分のこの感触の理由を・・・。

自分だけがなぜそんな感触を覚えるのか。それは、指先が異常に鋭かったからだ。人の指はただでさえ感覚神経が多い場所。自分の場合、それがより鋭敏になっていて、それで、原子「自身」を触っていると感じるのではないのだろうか。

これなら、空気がさらさらし（2）、水がざらざら（3）と

感じ、布やビー玉もざらざら）（4）に感じることも説明できる。
このことを悟って僕は、思わず「ばんざーい」と叫んでしまった。
直後に母に「どうしたの、空？」と尋ねられ、「いや、なんでもな
いよっ」とごまかしたのは言うまでも無い（5）。

三

そこからは発見の連続だった。時々触れる大きな塊が、実は菌や
ウイルスだったり、物質によって表面の触り心地が微妙に違ったり、
指紋も感じ取れたり（手を洗ってから、だが）。とにかくメモしな
いと忘れそうなほどであった。

そうして、北上高校の入学式を迎えた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

注訳：

1・・・確か銀の表面写真だったような気がする。いつか触つて
みたい。高そうだけど。

2・・・酸素や窒素分子などが空気中を漂っているから。時々ア
ルゴン原子やクリプトン原子とかに触れることもある。

3・・・ものすごい数（1立方センチメートル中に $6 \cdot 02 \times 10^{23}$ 個）の水分子が水の中にあるから。

4・・・布の繊維やビー玉表面の細かな傷に触れるから。

5・・・自分の不思議な感覚は、両親にも秘密なのである。なぜ
かって？ だって、気を遣われたら嫌だし、第一、両親が絶対秘密
を守るとは限らないから。

第1話 空気 (後書き)

完全オリジナル小説第一弾が、この小説です。

頑張って書きますので、どうかコメントよろしくお願いします。

・・・え？注釈が多い？すいません。この小説ではよく出てきます
(たぶん)ので、どうか許してください。

第2話 炭素。

—

北上高校では、入学式の後、すぐに教室に向かう。名前順に並んだ席に、僕は座った。

「・・・こうしてみると、新しいもんだなあ」
ボソリと、そうつぶやいた。

知らない人。知らない学校。知らない環境。その中で、今手に触れるものの感触は変わらない。

そう考えながら腕を回したり机に触ったりしていた時、教室のドアが開いた。

「はい、全員席について」

女性の人だった。きっと担任なのだろう。美しい顔だった。

「おはよう。私が今年一年担任を受け持つ木庭花実。こばはなみよろしく」

「おはようございます・・・」

皆がそう返事をした。

「・・・では、これから最初の席替えを行います」

「えー!？」

クラスが沸いた。しかし、それに構わず、先生は大きな箱をドンと教卓に置き、皆に小さな紙の紙片を回した。

「生徒手帳にも書いてあることです。・・・では、その紙に自分の本名と振り仮名を書いて、四つ折にして前の箱の中に入れなさい」
名前?・・・ん?振り仮名も?

そう疑問を抱きながらも、僕は普通に、「水谷空みずたにそら」と書いた。そして、紙を前の箱の中に入れた。

全員の分が集まると、先生はおもむろに黒板にクラスの席の図を描き、それから箱の中に手をつ込み、かき混ぜた。
その時気付いた。

ああ、クジか。

生徒が見つめている先で、先生は黙ってクジを引き、名前を読み上げながら黒板に名前を書き込んでいく。・・・その為の振り仮名？なかなかナイスな方法ではないか。

そんな風にして10分後、全てのクジが引き終わった。

決まったら、早速移動である。

机をガラガラと動かし、黒板の図通りにしていく。

自分の場所に机を動かし、席に着いた。やれやれ。

「さーて、隣の席は・・・ん？」

右隣の席に座っている同級生を見て、思わず息を呑んだ。

・・・凄い。顔も凄い（かわいい）けど、肌が特に凄い。

シミやソバカスやホクロ等が一切無い。軽い凹凸すらない。まさにつるんつるんの肌である。

その凄さに呆然としてみると、彼女のほうから挨拶をしてきた。

「私、おきめやち沖綾子。よろしくね」

「こ、こちらからこそよろしく・・・」

と言いつつも、視線は彼女の肌を見つめたままである。

「?・・・ああ、この肌ね」

流石に気付いたようだ。

「いえ、あ、その・・・」

「まあ、驚くのも無理無いわ。普通はここまでつるつるじゃないし」

「はあ・・・」

「後・・・」

「何？」

「私、数学と化学が死ぬほど弱いから、そこんところよろしく」

「・・・はあ・・・」

別に、理系って訳じゃないんだけどなあ。

そんなこんなを話している間に、学校のチャイムが鳴った。

速い。授業が速い。中学校はなんだと思う程に速い。写している内に授業が終わる。なかなかハードだ。

それは周りも同じ様で、休み時間にまで予習・復習をしている人もいる。

大変だけど、自分もがんばることにしよう。

そんな中で、一番の楽しみはやはり昼食である。

それは周りも同じ様で、思い思いに食事を楽しんでいる。

さて僕も・・・とざらざら（自分の感覚で）な弁当箱を開いてざらざら（同）の箸で食べようとした時、突然教室のドアが開いた。

「どうもー、文芸イラスト部です」

どうやら、先輩方によるクラブ紹介らしい。

「えー、私たちはこんな風なイラストとか漫画とかを自由に書いて楽しむクラブでありましてー・・・」

と、黒板にイラスト（A4）とかを張っていく。

絵にはあまり興味は無いけど、まあ、行ってみよう。

放課後、その文芸イラスト部の部室の戸を叩いた。

「いらっしゃーい」

昼食中もそうだが、なかなか元気がいいクラブである。

「あ・・・はい」

まずは自己紹介。

「お名前は？」

「み、水谷空です・・・」

「ああ、そう。見学なら、ゆっくりしていつてね」

ゆっくりって・・・。まあ、そうすることにしよう（暇だし）。部屋を見渡す。お世辞にも綺麗とは言い難い部屋である。

資料等が積み上げられ、それなりに整理はしているらしいが、やはり乱雑だ。

それでもなんとか座り（座布団）、目の前の白紙の原稿用紙を眺めていた。

すると、横（にいる先輩）からこんな声がした。

「水谷君」

「（覚えるの早！）・・・はい？」

「水谷君は、どんなのが好きなの？」

「好きなのって・・・ジャンルでってことですか？」

「そうそう、それぞれ」

弱った。

漫画は読むが、別にしょっちゅう読むわけじゃないもんなあ。迷った末、僕はこう返した。

「特に・・・」

「ふーん、何でもってことね」

・・・ええ！？なんでそっちにとるの！？・・・まあ、いいか。

三

まあ、とりあえず、模写である。模写は画力アップの基本らしい。・・・しかし。

身近な物・・・消しゴムや鉛筆とかをいちいち描くというのもなあ。

どうしようかな・・・と考えていると、ふと、目の前の原稿用紙に目が行った。

そうだ。こいつを描こう。

と言っても、紙面の形そのままではない（当たり前）。その表面を指で感じ取って描くのだ。

そう言えば、物の表面をいちいち描いたことが無い。恐らく興味

が無かったからだろうが、自分でも意外だった。

とはいえ、難しい。確かに感じ取ってはいるが、それを絵にすることがどれだけしんどいことか。巨人が地面を触っているようなものである。

しかも、あまりに鋭敏なので、紙の表面のその繊維の分子まで感じ取ってしまう。それを描くと絵が真っ黒になりかねないので、程々で止めなければならぬのだ。

・・・がんばって描こう。

とりあえず、5 c m x 5 c mほどの大きさに表面を描いていると、隣の先輩が、休憩中なのか覗き込んできた。

「な、何ですか・・・」

「何描いてるのー」

そこで適当に「林です」とか言っていればよかったのだが、つい正直に言ってしまった。

「紙の表面です・・・」

「・・・紙？」

「はい、紙です」

「・・・えええ！？ちよつとみんな見て！」

・・・マズイ。

「これ見てこれ！」

「ええ、何？」

「『紙の表面』だつて！」

「スゲー」

「顕微鏡写真じゃん」

「どうやって???」

・・・バカウケである。

このままいては、僕的能力を秘密に出来ないかもしれない。
ここは立ち去ろう。

「あ、あの・・・すみません」

「ああ、水谷、どうした？」

「ちよつと急用を思い出して・・・」

「えー？」

「どうしてこの絵を描けたら聞かせてよー」

「いや、だから急用が・・・」

「もしかして視力100.0とか」

「両目共1.0です・・・」

「じゃあどうやって？」

「いや、だから帰らせて・・・」

「いや、まあこつちも聞きたいからさ」

・・・と、約5分間の押し問答の末、終に白状することとなった。

「実は・・・」

「なになに？」

「指が・・・その・・・敏感で・・・」

「ほう、指が・・・て、えええっ!？」

「盲目の人が敏感だとは聞いたことあるけど、水谷は普通に見える
(1) もんなあ」

「でもこんなん描けるほどって・・・もしかして、ナノレベル(2) ってヤツ？」

「ま、まあ・・・」

「すごいじゃん！テレビに出れない？」

「いや、これは秘密にしたいんで、絶対に漏らさないようにして欲しいのですが・・・」

「おう！大丈夫大丈夫！秘密にしてっから！」
大丈夫だろうか・・・。

「じゃあ、今描いている漫画の紙面だつて読み取れる？」

「やったこと無いけど・・・多分」

「やっぱりここにいなよ水谷君！便利じゃん！」

「・・・え、どこがですか？」

「なんか斬新なトーンとか出来そうじゃん」

「・・・」

結局、午後5：30の最終下校時刻まで、ズーッと部室で質問攻めに遭ったのだった。

四

それから。結局文芸イラスト部に入部させられ、毎日いろんなものの表面を描かされている。そんなに面白い物なのかなあ・・・。

とにかくこれが、僕的能力が皆に受け入れられた瞬間だった。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

1・・・作者注：この「普通」はあくまでも「視力が悪くない」という意味での「普通」です。念のため。

2・・・ご存知かもしれませんが、「ナノ」は単位の接頭語の一つです。1nmは1mmの1000分の1の1000分の1（10億分の1m）。地球を直径1mの球と考えるとビー玉の直径が1nmとなるって言うぐらい小さいのです。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

第2話 炭素。（後書き）

すいません、遅筆で・・・。
これからがんばります。

第3話 油脂

—

「あの日」の次の日。

教室に入ると、クラス中の人々に取り囲まれた。

「ど……どうしたの？」

そう聞いた瞬間、皆が口々に喋りだした。

「お前凄かったんだな！」

「指が物凄く敏感って本当！？」

「指紋とかも読み取れるんじゃない？」

「……どこから漏れたのだろう。まあ事実だから、否定も出来ないしな……。」

「まあ、そうだけど……。」

「じゃあ俺の手触ってみてよ！」

「私も！」

「……本気ですか……」

そして結局、クラス中の人の手を触る羽目になった。

「どよ！俺の手！」

「うーん……こちら辺に古傷があるような……。」

「あ、そうそう！さすがだな！」

「次は私よ！」

「……えー……なんか力サついてない？」

「え……そうなの？」

「うーん、なんか角質が剥がれてきてるから……。」

「そうなの？ありがとー」

「いやいや……。」

なんか、休み時間、延々に同じことを繰り返しているような気が

する。なぜだろう。

まあ、別に悪いことではないし、「バレる」というリスクが消滅した分だけスクールライフを送りやすくなったわけだが、なんだかなあ……。

そうして地味に触りまくっていると、後ろからあの声がした。

「へえー、水谷君ってそうなんだ」

二

「え？」

僕が振り向くとそこには、沖さんの姿がいた。

「それって、生まれつきなの？」

「え、ま、まあ……」

「すごいねー」

「う、うん」

なんか、緊張してしまう。そんな時だった。

「それじゃあ私のも、触ってみてくれる？」

「……え？」

「触ってみてよ」

「は、はあ……」

そう言えば、この人の肌は触ったことがない。どんなのだろう……。

試しに触れてみた。……その瞬間、僕はのけぞった！

「……な、何ですか、これは……」

「え？どうだったの、水谷君」

「い、いや……あまりにもすべすべだから……」

「そうでしょ？肌には気を遣っているから」

「そ、そうですか……」

。 気を遣っているなんてもんじゃない。なんなんだ、この肌は……。

普通、人の皮膚は、凹凸があり、毛穴から毛も生え、時として傷や傷跡があり、皺もある。ホクロなんてしょっちゅうだ。そして表皮常在菌が1平方センチメートルあたりウン千万個以上も存在する「すみか」でもある。

だから皮膚を触ると、指紋等の凹凸は勿論微生物の蠢き^蠢まで分かる。悲しいが、それが現実なのだ。

しかし彼女は違う。そんな凹凸が全くといって良いほどない（流石に汗を出すための汗孔は開いているが・・・）。辛うじて指紋等の紋様や関節部の皺はあるが、それぐらいだ。菌もほぼ存在しない。つまり、普通の人の肌ではないのだ。

そんなことを考えながら他人の皮膚を触っていると、チャイムが鳴った。

三

それから数日後。事件が起きた。

教室に入ると、二人の同級生が言い争いをしている。

「お前この携帯弄^{いじ}っただろ！」

「弄^{いじ}つてないよ！」

「嘘つけ！」

「・・・何があつたんですか・・・」

「実は・・・」

・・・聞くところによると、どーやら携帯のメールが一部消されていると言う。届いている筈のメールが存在しないと言うのだ。

「そんな訳無いでしょ・・・もう一度確認してみたら・・・」と僕が返そうとしたその時。

二人が同時に喋りかけてきた。

「『なあ水谷』」

「な・・・何？」

「『お前だったら分かるよな？』」

「・・・え、何が？」

「『携帯を触っているかいにかどうか！』」

二人曰く、指先が敏感だったら指紋も読めるよな、ということらしい。どうやら、僕的能力に目を付けたようだ。僕も暇だったので、快く承諾した。

・・・しかし。これほど面倒だったとは。

自分の手の指紋を無くすために手を石鹸で洗い、拭いた後すぐに携帯を触って指紋を紙に書き写し、そして相手の手を触ってその指紋を確認・・・。。恐ろしく長時間の作業となった。

・・・そして。携帯から最後（42個目）の指紋を取って照合した時。

「・・・これも違うね・・・」

「・・・そうか・・・」

「結局、『触ってない』ってなったのか・・・あ」

「え、何？」

「もしかしてカード（携帯に挿している）の方にバックアップ取ってるかも・・・！」

「・・・えええ！？」

すぐに調べてみると、確かにメールの存在が確認された。思わず喜び合ったが、今までの苦労は何だったんだ・・・。

思わずへたり込んだ時、チャイムが鳴ったのだった。

第3話 油脂（後書き）

すいません、遅くなって・・・。
次は早く書きますので。

第4話 水。

—

水。地球上に最も豊富に存在する液体であり、人体の70%以上を占める重要な物質でもある。それでいて化学式は H_2O と、正に「シンプル・イズ・ベスト」をそのまま表現しているかのようだ。そんな水だが、勿論分子自体はとも小さく、到底人間に感じられるものではない。だから単に、「冷たい」「熱い」などとしか感じないのだ。

しかし、僕は違った。僕はそれを、この手で「触る」ことができるのである。

幸い飲む分には平気だったが、風呂やプールに入る際などは、少々どころかなり気になったものだった。

とはいえ水が苦手なわけではなく、むしろプールは好きであった。それは、僕のこの能力に起因している。水に触れられる。つまり、いい泳ぎかそうでないか、それを自らの感覚で体感できたからだ。

それで、プール、それも水泳が僕の得意科目であった。

二

高校での初のプール授業。プールに入る前から、僕はわくわくしていた。勿論、久しぶりにプールに入るからである。

素早くプール水着に着替え、プールサイドへと飛び出していったのだった。

授業中。

数え切れないほどの分子を感じながら、僕は泳いでいた。いくら

得意と言っても今は授業。とりあえず前に泳いでいる人にぶつからないように気をつけていた。

しかし。突然前の生徒が立ち止った。とっさだったので避けきれず、その生徒にぶつかってしまった。

「わっ」

「ご、ごめん……。でもなんで急に立ち止まったりして……」

そう言っ僕は立ち上がって生徒に訊いていると、皆の様子がなんだかおかしい事に気がついた。

揃って、ある方向を向いていたのである。

「？」

疑問に思いながらも、僕はその方向に向いてみた。

すると。そこには、物凄いスピードで泳ぐ一人の女子生徒がいた。豪快な水しぶきのせいでよく見えないが、誰か僕にはすぐに分かった。

「沖さん……」

そう。皆が注目していたのは、沖さんだったのである。

三

「すげえ……」

「速……」

「沖さん、すっごーい」

皆が口々に言う。道理で立ち上がって止まるわけだ。それを無視してか、彼女は黙々と泳ぎ続ける。

しばらく眺めていたが、ふと僕は思った。

「あれ？」

「どうした水谷」

「なんか、あれ、変じゃない？」

「どこがだ？無茶苦茶速えだけじゃなか」

「いや、そうじゃなくて……」

おかしい。何かがおかしい。なんだろう・・・あ。
フォームだ。

クロールのはずだが、なんだか足が上手く動いていない。手にしても、普通にストリートプルだ。

じゃあ、なんであんなスピードが出るんだろう・・・。

そんなことを考えながら、僕はただ彼女を見つめていたのだった。

四

プール授業の後。

僕は体育の先生に聞いてみた。

「あの、先生」

「水谷、どうした？」

「あの・・・沖さんの泳ぎを見て、どう思いましたか？」

「どうって・・・ああ、あれね・・・」

そう言って、先生は1秒ほど黙った。

そして。

「あれは・・・不思議だったよ。長年教師生活をしてきて、初めてのケースだ」

「確かに不思議ですね・・・」

「確かに、長年やっているけど、『これは！』と唸るような生徒に出逢うこともある。でもあれは・・・」

先生が黙るのも納得だった。

才能があつたら普通、どこかにその片鱗は現れるものである。水泳の場合、フォームなどだ。

しかし、「フォームがおかしいのに速い」となると、もはや”才能”だけでは説明できなくなる。ただ、不思議だと言えなくなるのだ。

そうしているうちにチャイムが鳴った。

「ありがとうございました。それでは教室に戻ります」

そう言って僕は、教室に帰ったのだった。

第5話 紙。

—

夏。八月には夏休みがあり、一年で一番のんびりできる季節である。

・・・しかし。われらには、その前に乗り越えなければならない壁があった。

それは・・・そう、期末テストである。

幸いながら、科学（生物）についてはさほど苦労はしなかった。なぜなら、実際にその手で「触る」ことが出来るからである。

事実、その力でこっそりプレパライトを触ってデッサンし、無茶苦茶に褒められたのである。

・・・しかし。それ以外に関しては、カナーリ苦労することになった。

数学。文字式までいいが方程式に苦しむ。なんなんだよ2次不等式って・・・。

現国（現代国語）。勿論問題は漢字ではなく読解である。・・・よくわからん。

古文。日本語に見せかけての暗号ではないかと思えてきた・・・。
英語。例文自体は面白いのだが、訳せと言われると自信が無い・・・。

英文法。最早、復習と言う名の勉強である。

世界史。・・・覚えることが多すぎる・・・。

・・・などと、押しなべて苦労することになった。左様、暗記は苦手なのである。

しかし。これを逃れる術は無い。僕たち生徒は、この敵と戦わなければならないのである。

そこで僕は、原始的だが、単語帳を使って覚える戦術に出た。見る。答えを書く。裏面を見る。採点する・・・。

毎時間、それを繰り返した。さらに、休み時間でも時々ぱらぱらとめくって眺めた。

その成果が出たのか、時々先生が出す小テストでも、それなりの点数を取るようになった。

そんなある日のこと。生物の時間が終わった後、僕は沖さんに呼ばれた。

「ねえ水谷君」

「な、何？」

「減数分裂って良く分かんないんだけど、教えてくれない？」

「あ、うん・・・」

そこで僕は、ちよつと緊張しながら説明した。

「・・・なので、配偶子が2のN乗個の多様性で出来ると言う訳です」

「なるほどね。ありがと」

「ど、どうも・・・」

それから彼女は、僕の机をさわさわと撫でた。

「・・・どうしたのですか？」

「・・・え？別に？」

僕が聞くと彼女はすつと、机から手を離した。・・・触り心地が いいのかな？

彼女からの質問は、その後にも何回かあった。その度に何気に机を撫でていたが、僕は別に気にしてはいなかった。勿論、それより

も沖さんと話せる方が嬉しいからに決まっているのだが。

三

・・・そして、テストの日。今日は生物と英語（英文法ではない方）である。

生物はまあ調子良く解けた。・・・が。

やはり英語は難しい。

教科書に載っている例文はまだしも、そうじゃない長文が出てきようものなら、もうお手上げである。

まあそんな意地悪な設問を用意することぐらいは分かっていたので、それ以外の問題を解いてから当たる戦術に出た。・・・それでも辛い。

気分を変えようと、問題用紙を払って消しゴムのカスを集めていると・・・あれ？

・・・突起？

机の一部分だけ、なんだか細かい突起がある。目で見て分からないと言うことは・・・跡？

普通に触ってみる。・・・なんだか文字のようだ。読んでみると・・・あ。

「長文のポイントは文節の理解」

・・・文節の理解？

「s o - t h a t 構文は見逃しやすいから気をつけて」

・・・s o - t h a t・・・英語か・・・いや、英語！？

どういうことだ？なんで文字が？？

そう考えた時にハッとした。

この机は、今まで長い間使われてきたのだと言うことを。

そこから先は楽だった。

机の上の跡を参考にしながら、僕は問題を解いていった。

多少罪悪感はあったが、目にも見えない跡をカンペだと言う人はいないはずだし、そもそもその程度の跡はどこにでもあるだろう。そう考えていた。

四

そうして全てのテストは終わり、その後、生徒への返却が始まった。

あの跡のせいもあってか、どの教科も、それほどひどいことにはなっていない。

僕は深く安堵した。

ふと沖さんの方を見ると、どうやら彼女も安心した表情だ。

目が合う。彼女は、僕に会釈した。感謝のつもりらしい。

僕の心は、久しぶりにうきうきしていた。

第6話 弗素。

—

それは、家庭科実習の時だった。

班の分担で、僕は洗い物係となった。別に好きではなかったが、料理が得意なわけでもなかったので、まあいいかな、と思つてのとだ。

「これ洗つてー」

「あいよ。あ、これ洗い終わったから拭いてー」

「おっけー」

そんな感じで、僕は順調に洗い物を済ませていた。

そして、大方の調理が済み、大きなフライパンがこちらに運ばれてきた。

「最後にこれ頼むー」

「おー」

そんなことを言いながら、僕はそのフライパンに触れた。

その時。その感触に、僕は大きくのけぞった。

「……………つるつるだ!!」

「どうした水谷ー」

「……………何かあったの?」

「どう見ても普通のフライパンだろ? 洗つちまえよー」

「あ、ああ……………」

だがしかし。僕は、その感触を、忘れることは出来なかった。

調理実習も終わり、最後に後片付けとなった。

この時も、僕は洗い物を担当した。しかし今度は、自分から洗い物を担当した。

理由は簡単である。そう、あのフライパンである。

改めて触ってみる。つるつるである。

「まだ気になるのかよ」

「ま、まあ・・・」

とはいえ、そんなにのんびり出来る訳ではない。普通に洗い物を済まし、僕は調理実習室を出たのだった。

二

つるつる。

普通の人ならば、ガラスとか金属とかを触ったときに、そんな風に感じるのだろう。

しかし、僕は違う。

ガラスですら、ざらざらに感じる。そもそもが非晶質なので、結構でこぼこしているのだ。金属にしても同様。どうしても、分子レベルではでこぼこになるのだ。

・・・しかし。あれは違った。

見た目は普通のフライパン。しかし表面はつるつる。そんな感覚は、今まで初めてだった。

「どうしたのよ」

「・・・え？」

休み時間。僕は、となりの沖さんにそう聞かれた。

「なんか、考え事してたじゃない」

「そんな、考え事って・・・」

「ずっと手を当ててうつむいているのが『考え事をしている』ってことじゃないの」

「・・・」

その通りである。

「いや、実は・・・」

「言わなくてもわかってるって」

「え？」

「あれでしょ？ほら、調理実習室のフライパンのことでしょ」
「・・・あれ？」

「え、なんで沖さんがそのことを？」

「そりゃ、あんなにわかりやすくのけぞっていたら分かるわよ」
「・・・」

内心、驚いていた。僕は、洗い物をしながらちよくちよく彼女の方を眺めていたのだが、彼女もこっちを見ていたのである。

「あれさ」

「うん」

「実はとっても簡単なことなのよ。みんな知ってるんだけど、黙ってる」

「え・・・何で？」

「そりゃあなたが特別だからに決まってるじゃない」
「！」

特別。そんなこと、考えたことも無かった。

いや、人とは違うことは分かっていた。でも、それで人に試されたりすることなんて今まで無かった。

「まあ、ホームセンターに行けば分かるかもね」

「え？」

「じゃあね。私、選択で移動教室があるから」
そう言つて、彼女は教室を後にしたのだった。

三

後日。

僕は、ホームセンターの前に立っていた。

勿論、今までホームセンターに言ったことが無い訳ではない。しかし、いちいち休みの日に、それも一人で行くことなんて今まで無かったのだ。

店に入ると、僕は真つ先に、調理道具が並べられているエリアへと向かった。

そして、手近にあったフライパンを手にとって触った。
すると。

「おお・・・」

これだ。この感触だ。この、つるつるな感じた！

しばらく撫で回していると、ふと、あることに気がついた。

そのフライパンには、こんなシールが貼ってあった。

「汚れに強いテフロン加工！」

その瞬間、僕は、全てを理解したのだった。

テフロン、つまりポリテトラフルオロエチレンとは、アメリカのデュポン社が発明したフッ化炭素樹脂である。耐熱性や耐薬品性（フッ化水素酸や六フッ化ウランにも耐える！）に優れ、地球上で摩擦係数の最も小さい（！！）物質でもある。

そんなテフロンだが、そのきっかけは、テトラフルオロエチレンのガスを詰めていたボンベが、その圧力からかいつの間にか重合して出来たものだという。そう、つまり、偶然の産物だったわけだ。

発明は、偶然によって起こることもある。

第6話 弗素（後書き）

・・・ええ。テフロンです。タイトルでバレバレでしたかね・・・。

フライパンでおなじみのテフロンですが、改めて見ると凄いですね！

『テフロン』と言えばフッ素樹脂を指すほどに、身近になりました。

・・・とは言え。高熱で分解されるのも事実。260 で劣化が始まり、350 で分解されてしまうそうです。・・・まあ空焚きしなければ大丈夫ですが、くれぐれもお気を付けを。

第7話 菓子。（前書き）

・・・ええ。勿論バレンタインデーの話ですとも。
チョコは・・・出るかも知れません。

第7話 菓子。

—

2月。1年の2番目の月、3学期の中盤、そろそろクラス替えの時期である。

3日には派手な豆のぶつつけ合いもある月だが、そんなことを気にする者など誰もいるまい。

そう。あの、「バレンタインデー」があるのである。

僕は別に、この日が嫌いな訳ではなかった。このこそばゆい、力才や香料成分が含まれた甘い空気はそれなりに面白いし、女子にチョコレートをもたらったこともある（義理でだが）。

しかし。いつも思うのである。

ぶつつちゃけ、手作りだろうが既製品だろうがどうでもいいじゃないか、と。

たまたまそれが「手作り」だっただけに、周りから矢のように突っ込まれ、食べるのを躊躇させられるのがどんなに多いか。その逆も然りである。どんなものだろうと、温度管理（ ）がしっかりなされた物ならば、美味しい筈なのである。

そんなことを、指でテオブロミン（チョコやココアの苦味成分）を感じながら、今までチョコレートを食べていたのだった。

しかし。ある時、その考えが一変したのである。

二

それは、2月の始めのことであつた。

某日があるせいか、どこか、男女の間には、よそよそしい空気が

流れていた。同性同士にしても、会話は基本小声であった。

ふと、僕は小声で聞かれた。

「なあ水谷」

「え？」

「お前は・・・誰なんだよ」

「・・・は？」

「誰にもらいたい、とかあるのかよ」

「いや、別に・・・」

「誰にも言わねえからさ」

・・・既にあなたに言っているであろう。

それは置いといて、僕は、別にトボけた訳ではなかった。

あまり、異性を意識したことはなかったのである。

なにせ、この能力である。美少女だろうがなんだろうが全く同じ

肌触り。「美女も皮を剥けば骸骨」を触覚で体感しているのだ。綺麗

だな、と思うことはあっても、憧れも何もなかったのである。

・・・しかし。

「どうせ沖さんなんだろう？」

「・・・え？何で？」

つい、そう返してしまった。

「だって、よく近くににいるじゃん」

「いやいや・・・あれは単に沖さんが勉強について聞くから教えてあげてるだけだよ」

「『ただだよ』じゃないだろ。聞きに行くほど仲いいってことじゃんか」

「え？そうなの？」

「全く鈍感だな」

「・・・」

単に、「友人に勉強を教える」ぐらいにしか考えていなかった。でも、そんな意味もあったのか。

その瞬間、僕の顔は熱くなった。

考えてみれば、彼女は最初から、「特別な人」だった。
その美しい肌。謎の能力。どれをとっても、特別だと言うのに十分なものだ。

・・・僕は、決めた。

三

その日は、珍しく風が穏やかであった。雲も無く、日の光は穏やかに差していた。

朝早く教室に入る。

「あら、早いじゃない、珍しい」

そこには、沖さんだけがいた。

「・・・いつも早いですね」

「誰から聞いたの？」

「いや、前に一度慌てて早く来てしまった時にもいたから・・・」

「そう」

「そう言えば、どうして沖さんは朝が早いんですか？」

「え？まあ、あまり長く寝ててもいいこと無いしね。言っでしょ。」

『早起きは三文の得』って」

「あ、そうですね」

「それに、家にだらだらいても仕方が無いでしょ。朝勉強の名目で、早く家から出てきた面もあるのよ」

「・・・勉強はしているんですか」

「ぼちぼちねえー」

・・・割と理由は適当なようである。

僕は話を切り出した。

「あの、さ」

「え？鞆には別に何も入って無いわよ」

「いやそうじゃなくて・・・」

「じゃあ何よ」

「じゃ・・・沖さん」

「僕と、友達になってください!!」

「・・・え？友達でいいの？」

「友達って・・・は！」

言い間違えたー!!

明らかにミスである。この状況で、『友達』は無いだろう。

・・・しかし。彼女は、意味ありげな言葉を返した。

「ふふっ・・・『友達』、ね」

「？」

「これを見て、同じことが言えたら、友達になってもいいわよ」

そう言っただけ彼女は、靴からノートを取り出した。

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

・・・チョコレートの成分であるカカオバターには複数の結晶構造があり、温度管理によってそれを細かく調整する。つまり、手間暇を掛ければ、それだけ美味しくなるのである。・・・ってことは、やはり美味しい手作りチョコレートは愛情の証なのだろうか。

第7話 菓子。（後書き）

チョコは・・・出ましたね。説明だけですが。

色々調べてみたところ、チョコレートも案外面白いことが分かりました。

本文中にも出てきたテオブミンという物質は、ヒト以外のほとんどの動物が代謝出来ないんだそう。道理でイヌとかに食べさせちゃマズイ訳だ。

しかも、カフェインと構造式がそっくりだったりします。うーん、植物って不思議。

さあ、次回は最終回だ！

第8話 肌。(前書き)

遂にクライマックス！

第8話 肌。

—

「の、ノート？」

僕はきよとした。

「見てて」

そう言つと、彼女はノートを開き、そのノドの部分に人差し指を滑らせた。

・・・すると。

「えっ」

ノートのページが、綺麗に1枚分ノートから離れた。彼女の手を丹念に見つめたが、刃物を仕込んである訳ではないようだ。

「え、何で？どうなってるの？」

「待つて。ここから面白いわよ」

そう言つと彼女は更に、その紙を机に置いて、指で何か文字を書いた。すると。

「・・・えええ！？」

彼女が指で書いたところには、黒い焦げ目が付いていた。念の為、紙を手にとって嗅いでみる。・・・焦げ臭い。

僕は彼女に聞いてみた。

「・・・これって、何かの手品なの？」

そうとしか考えられなかった。だが。

「正解・・・ではないわね。正確には」

「『手品』じゃなきゃ魔法とか・・・」

「そつちでも無いわね。魔法だとしたら、こんなショボイ魔法なんて使わないわよ、普通」

「・・・」

・・・じゃあ、一体どう言つことなのだろう。

「分からない？そんな素敵な手を持っているのに？」

「『素敵な手』？・・・あ」

そうか。僕は、その紙を手を取った。

そして、ノートから分離された断面を触ってみた。すると、まるで元からそうだったかのように断面は滑らかだった。

「おお・・・」

思わず僕は唖った。すると、彼女はとんでもないことを口にした。

「当然よ。私の能力ちからを持つてすればね」

・・・ち、力？

「え、どう言うこと？」

「まだ分かってないようね・・・」

「そりゃそうですよ！どんな力なんですか！」

「そんなに焦らなくても・・・。まあ、言葉で使えるのは難しいんだけど、正確に言うなら・・・」

「正確に言うなら？」

「私は、

肌に触れた物質の結合を解いて、それを再構築する能力のうつくしきちから

があるのよ」

二

「・・・再構築」

「そ、再構築」

「再構築ねえ・・・」

「再構築ですから・・・」

「再構築なんだ」

「・・・もしかして、良く分かってない？」

よく分かっているでは無いか。

「まあ、ね・・・」

「ま、こんなこと一発で理解できたら変態よね」

「『変態』って・・・」

「まあ分かりやすく言うと、物質の表面を作り変えられるってことよ」

「はあ・・・」

とりあえず返しはしたが、よく分かってはいない。

それを知っていてか、彼女は1から説明してくれた。

「例えばさつき、ノートから紙を分離させたけど、あれはなぞる際に触れていたところの紙のセルロースの結合を切っていたのよ。焦げ目にしてもそう。なぞったところの紙と空気中の酸素を化合させて、ああいった組織を作り出したのよ」

「そう言われれば、そんなような・・・あ、じゃ、泳ぎが異様に速かったのは？」

「あれは肌に触れていたところの水を水素や酸素の気体にして滑りながら泳いでたのよ」

「机の上のあの突起は・・・」

「私が書いたわ。ナノレベルのカンペなんて素敵じゃない？」

「じゃあ、肌が異様につるつるだったのって・・・」

「ニキビや傷なんて私の能力の敵では無いわ。全部消したわよ。勿論、痛かったけどね」

「おお・・・」

なんと言うことだ。よりによって、沖さんもそんな凄まじい能力を持っていたとは！

あまりの真実に、僕は空いた口が塞がらないでいた。

すると、彼女が次の言葉を口にした。

「・・・あのさ」

「え？」

「私の中では、『この私の能力を知っていてかつ秘密を守る人』が『私の友達』なの。あなたは記念すべきその第一号ね。・・・もち

ろん、あなたがOKすればだけど」

「は、はい。よろしく願います」

「いいわ。そろそろ人が来るから、続きは放課後にね」

「・・・『続き』ですか」

「そうよ」

言っている間に、教室のドアが開き、他のクラスメイトが教室に入ってきた。

とりあえず教科書等を開いて、その場をやり過ごした僕であった。

三

その日の放課後。僕と彼女は、教室に残っていた。もともと、彼女の方は、一旦どこかに行ってしまうて、それから40分もしてからの帰還だった^が。

「・・・どんな偽装^{アリバイ}工作なんですか」

「ごめんごめん。2人だけが教室に残ってたら不自然かと思って」

「こっちはのんびり待っていたお陰で鍵閉め役ですよ・・・」

「まあ、後で返せばいいじゃない。・・・話の続き、する？」

「お、願います」

「いいわ。早速始めるわね」

「私がこの能力に気が付いたのは・・・そうねえ、5歳ぐらいの時ね」

「・・・同じだ・・・」

「同じなの？まあ、しばらくは、良く分からずに物を壊したりしたわ」

「はあ・・・」

あの能力である。そんなのが連発されたら、家族や周りとはたまつたもんじゃないだろう。

「でもね。私は気が付いたの」

「？」

「これは、天が私に与えてくれたチャンスじゃないかって」

「・・・チャンス？」

「そう。これは、天が私に、この能力を周りの人のために使いなさいってことで与えてくれた能力なのよ」

「！」

「・・・気づかなかった。天から遣わした力。そう言った考えもあったのか。」

「それから、私はこの能力を色々と試した。どこから出るか、どこまで届くか、何が出来るか。一年もしない内に、それを感覚的に知った」

「・・・」

「そして現在に至ると言う訳。・・・何か聞きたいことある？」

「聞きたいこと・・・」

そんなこと、幾らでもある。

今までどんなことに使ったのか、とか、副作用が無いのかとか。でも。その時、僕がした質問はただ一つだった。

「その力・・・親とかには話したの？」

そう聞くと、彼女は即答した。

「したわよ」

「・・・ためらいとかは無かった？」

「なに言ってるの。天から授かった力だもの、命を授けてくれた両親に明かすのは当然じゃない」

「そ、そうか・・・」

その発想は無かった。よく考えたら、至極真つ当な話ではないか。・・・その様子だと、あなたは明かしてはいないようね」

「まあ・・・。駄目だったかな・・・」

「いや、別にその選択もあるかもね。ここまで話が広まっちゃった意味無いけど」

「・・・」

・・・さっき言ったことと違ってないか？これがいわゆる「建前と本音」というやつなのだろうか。

そんなことを考えていると、彼女がふと、壁の時計の方を向いた。そして。

「あ！」

「・・・え？」

「時間！もう5時回ってるし・・・」

「・・・あ」

時計を見ると午後5時過ぎ。ちよつと喋りすぎたようである。

「外、真っ暗ですね・・・」

「ねえ水谷君」

「ん？」

「暗いし、一緒に帰ろっか」

第8話 肌。(後書き)

・・・これで、彼女の謎も判明しました。あ、まだ読み終えない
てくださいよ。

まだ、続きがありますから。

第9話 その後。(前書き)

やっと最終回です。長かった・・・。

第9話 その後。

—

「告白」した週の次の日曜日。僕は、携帯の着信音で起こされた。
「・・・一体誰が・・・」

少しムツとしながら携帯を開くと、次のような一件のメールが入っていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

差出人：沖 綾子

タイトル：依頼

内容：

依頼よ。11時に○○駅に集合すること。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「仕事か・・・」

僕はそうつぶやきながら布団を片付け、顔を洗い、朝食を取り、出発の準備を整えた。

既に起きていた父親に聞かれた。

「今日は休みだぞ？どこに行く気だ？」

僕は、こう答えた。

「友人と約束があるんだ」

「こんな朝早くにか」

「うん。早く行かなきゃ間に合わないことが合ってね・・・」

「・・・そうか。ならいいんだが・・・」

どうやら納得したようだ。

玄関で座り、靴を履いた。

そして出かける際、心の中でつぶやいた。

父さん、ごめんなさい。

そして、11時。

。。駅に着いた時には、彼女は既に待ち合わせ室の中にいた。

「遅いわよ」

「・・・あなたが早すぎるんですよ・・・」

「なに言ってるの。時間は有限なのよ？無駄には出来ないわ。『時は金なり』って言うじゃない」

「そりやそうですけど・・・」

「まあ、いいわ。最初の依頼はこの駅近くの片木さんよ」

「片木さん・・・何を直す依頼なの？」

「行ったら分かるって。とにかく行きましょ」

そこから、徒歩やバスを利用して、片木さんの家に着いた。

呼び鈴を鳴らす。片木さんの母親が出た。

「はい。どちら様ですか」

「片木さんの友達の沖と申します。片木さんと約束していたので来ました。入れていただけますか？」

「お友達の方？さあどうぞ・・・」

ドアが開いた。

「おじゃまします」

「・・・沖さん、そこまで丁寧な口調でなくても・・・」

小さな声で突っ込むと、彼女も小声で返した。

「仕事のためよ」

「・・・」

そして、彼女の部屋。

「来てくれたのね！」

片木さんが出迎えてくれた。

「勿論よ。約束は守るわ」

沖さんが返す。すると片木さんは、僕の方を指差してこう聞いた。

「・・・あれ？何で水谷君が？」
すると沖さんは。

「ああ。彼は私の助手で友達なの」

「『助手』が先なんですか・・・」

「ああそうなの。私てつきり『彼』かと・・・」

「無い無い。何の理由^{わけ}で仕事に彼氏を連れて行く必要があるのよ」
突っ込むところですか！

「・・・で、直すものは何なんですか」

「あ、そうだったわね。これなんだけど・・・」

そう言って彼女の棚から取り出されたのは、ある人気ミュージシヤンのベストアルバムの初回限定版だった。

ぱっと見、別に壊れたところは無いように見える。

「・・・どこを直して欲しいって？」

「ここよここ！」

そう言って彼女が指差したところには、細い小さなヒビが入っていた。

「あー、こりゃ割れてるわね・・・」

「表紙のカバーがあるから分かりづらいんだけど、結構広い範囲が割れてるのよ」

「・・・どうして割れたんですか？」

「知らないわよ！買って早速聴いていたら、足元で割れるような音がしたのよ！」

・・・それを人は、『踏んづけて割った』と言っんです。

「分かったわ。でも、これだけ広範囲じゃ高くつくわよ」

「分かってるわ。だからこそ頼んでいるのよ」

「ふむ・・・水谷君、ちよっと調べてみて」

「あ・・・はい」

そう言われて僕は、そのケースを手を取った。

相当頑張ったのだらう。瞬間接着剤で丁寧に張り合わせているようだ。

しかし、やはりそこは人の子。どうしてもつなぎ目が分かってしまふ。

「見事に割れてますね・・・全体のひび割れの長さは大体30cmぐらいですね」

「ありがとう。それじゃ早速直すわ。片木さん、作業に集中したいから、とりあえず部屋から出て」

「お願いします・・・」

そう言つて彼女は、扉の向こうへと去つていったのだった。

二

「・・・洋子さん」

「なあに、水谷君？」

「一日何軒こんな『依頼』が来ているんですか・・・毎日修理しているでしょ・・・」

「そうねー。1日1軒程度じゃ足らないくらいあるわね」

「マジですか・・・」

そんな話をしながら、僕はふと、あの日のことを思い出していた。

「告白」をした帰り道。僕は彼女と、メールアドレスを交換した。但し、お近づきの証・・・ではなく、連絡のためだと気がついたのは、その次の日のことだった。

その日のメールには、こう書いてあった。

- - - - -

差出人：沖 綾子

タイトル：

内容：

あのさ・・・放課後、音楽室に来てくれない？

- - - - -

- - -
放課後、である。否が応でも気持ちが高まってくるではないか。
終礼が終わると、僕は早速、音楽室へと向かった。

・・・そこには、沖さんと、楽器を持った、1人の音楽部員がいた。

「・・・え？」

「来てくれたのね。待ってたわ」

「いや、あの、2人？」

「そう。この、楽器を誤って壊してしまった、不運な音楽部員のためにね」

「・・・どうしたの？」

ぼうっとしていたせいか、彼女が尋ねてきた。

「いや、別に・・・」

「ほら。この場所、断面はどんな風になってるのか教えて」

「あ、ああ・・・ところでさ」

「ん？」

「あんな風に迎えられるってことは・・・有名なんですか、沖さんは」

「もちろん！何せこの力よ。使わない手は無いじゃない！」

「・・・でも、結構なお金取りますよね・・・」

「失礼ね。手間賃よ手間賃。『1cm²につき100円』って、結構良心的じゃない？」

「どこがですか・・・」

「そう？なにせ、『完璧に』直るのよ。接着剤とかとは格が違うわ。分かるでしょ、それぐらい？」

「・・・まあ・・・」

確かに。沖さんが直した物は、僕でも分からないほどに綺麗だ。

「・・・でも、ちょっと待ってくださいよ。そんなだったら、僕がいなくてもなんとかなるんじゃないんですか・・・？」

「そんなことは無いわ。周りが見えない暗い場所でも折り紙は折れるけど、明るかったらもつと折りやすいでしょ？それと同じよ」

「・・・僕は目と同じなんですか・・・」

「そりゃそうよ。でも、目があるからより便利に生活できるのよ。違う？」

「まあ、そうですね・・・」

「感謝してるわ、あなたには」

「・・・うん」

その言葉が、僕には嬉しかった。

三

修復が終わった。

「終わったわよー」

そう呼ぶと、彼女が部屋に勢いよく入った。

「直ったのね!？」

「ええ、ばっちりよ。確認してみる？」

そう言って沖さんは、修復したアルバムのケースを渡した。

「・・・直ってるー!すごい!傷一つ無い!」

そりゃそうだ。・・・それなりの時間（１時間）はかかったが。

「それじゃあお金についてだけど・・・」

「あ、大丈夫!ちゃんとあるから・・・」

そう言って、片木さんは貯金箱を取り出した。しかし。

「ちよつと待って。ここで整理よ」

「・・・え？」

「水谷君も言っていたように、元のヒビの長さは全部で30cmほど。普段は1cm100円でこなしているから3000円ね」

「・・・」

「でも、友達のよしみで、500円ぐらい負けてあげる」

「やった!」

「でも、細かいところは水谷君の力も借りたから、結局300円アツプの2800円よ」

「は、はあ・・・」

そう言つて片木さんは、お金を沖さんに渡した。

「確かに、受け取りました」

その後、僕と沖さんは家を出た。

「あー・・・」

「ん？」

「何か、沖さんの『依頼料』つて、割と適当なものなんじゃ・・・」

「そう？『1cm²につき100円』の原則は守っているわよ？」

「でも、『友達だから500円マイナス』とか『面倒だったから300円プラス』とか、コロコロ料金が変わるじゃないですか」

「そりゃそうでしょ。こんなこと出来るのは私だけなんだから結局言い値よ」

「・・・」

無茶苦茶である。

「それに、これ、結構体力使うのよ？多分あの作業で200kcalは使っているわね」

「・・・指先しか動かしてないじゃないですか」

「なに言ってるの。固い原子結合を解いたり繋げ直したりしているのよ？神経も使うし、中々大変なのよ？」

「それにしても中々楽しそうじゃないですか」

「そりゃそうよ。好きな仕事に頑張れるって、最高じゃない」

「・・・僕にはだんだん沖さんが恐ろしく見えてきました・・・」

「そう？ま、この能力は悪用すれば恐ろしい平気だからね。恐れるのも当然だわ」

「いや、そっちじゃなくて・・・」

「じゃあ何がよ」

「・・・」

そのボリぶりに、とはさすがに言えなかった。

「ちよつとおながが空いたわね・・・チヨコ食べる？」

「いつも持ち歩いているんですか？」

「当然よ。チヨコレートは軽量かつ高エネルギー、しかも美味しいときた最高のお菓子よ」

普通、女性なら嫌がりそうな性質なのにな・・・。

「そう言えば、学校でもよく食べていますよね」

「そうねー。バレンタインデーにも普通に食べていたし」

「・・・周りからの視線が気にならないんですか」

「全然。だって自分の金で買ったんだし。チヨココロネとかだったら文句言われないのかなー」

「・・・それはそれでキャラが被りますから止めてください」

「それもそうね・・・あ」

「えっ？」

「また依頼よ」

四

そこから、僕と沖さんはあつちこつちの家に訪問した。

汚れたトレカを直し、プラモを直し、にきびを治し。何軒も回っている内に、外はもう夕方になった。

「稼いだわねー」

「・・・疲れました・・・」

「チヨコ食べる？ 飴もあるわよ？」

「・・・なんでこの人に限らず女性はお菓子を常にストックしているのだろう。」

「いや、別にいいです・・・」

「そもそも疲れたのは私のほうでしょ。あんだだけ連発したのは久しぶりねー」

「こっちは乗り物で疲れしましたよ・・・」

「しかしあれは無かったわね。『濡れた同人誌を直してくれ』って。思わずそれを八つ裂きにしたくなったわ」

「・・・」

それを笑いながら言いますか、沖さん。

「にしても稼いだわ。やったね」

「そうですねー・・・」

こないたいけな少女の財布には、既に5万円もの大金が収められていた。普通こんなにボロ儲けできる商売って援・・・ゲフンゲフン。

「・・・それにしても・・・」

「ん？」

「そんなに稼いで何を買うつもりなんですか？」

「そりゃあ、色々よ。ミルク味の板チョコを箱買いしたり、本を買ったり、肌を『手入れ』したり・・・」

「『服を買う』とか『友達と遊ぶ』とかの言葉が入っていないのが沖さんらしいです・・・」

「服ぐらい作れるわよ。この力さえあればまさに『天衣無縫』よ？」
「・・・」

あなたは天女なんですか？・・・別にいいか。

「遊びだつて、趣味に勝るほどの遊びは無いわ。まあたまにはトラップとかしたりはするけど」

「・・・何か、寂しく無いですか？」

「どこが？ 妙に友達付き合いするよりよっぽどマシよ」

「はあ・・・」

「それに、私には水谷君がいるしね」

「・・・え、それ、どういうことですか！」

「さあ、仕事の締めは食事よ！そこにファーストフード店があるから、一緒に行く？」

「行きます・・・って、質問に答えてくださいよ・・・」

それから、彼女と僕の新しい日々があつたりするのだが、それはまた別のお話。

僕は、彼女の言った一言が忘れられない。

「これは、天が私に与えてくれたチャンスじゃないかって」

第9話 その後。（後書き）

・・・はい。前書きにも書きましたが、これで完結です。

何気に沖さんが淡泊（冷たい？）な気もしますが、彼女はその力を活用していただけなのです。わかってあげてください。

にしても長かったなあ……。最後までお読み頂き、誠にありがとうございました！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3714g/>

空気をつかむ者

2010年10月8日13時12分発行